
さくら

海風漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくら

【Nコード】

N2256I

【作者名】

海風漣

【あらすじ】

美緒ちゃんとさくらちゃんの、ものがたり。

さくらちゃんが死んで、それからの美緒ちゃんの、心の葛藤。

—— 見えるかな、あのことば。

—— あえるかな、またいつか。

出逢ったのは、桜が満開になったある昼下がり。

（前書き）

出逢ったのは、桜が満開になったある昼下がり。

ありがとね。

伝えたいけど、伝えられない。
もつとそばにいてほしかった。
もつともつと——。

「——ただいま、さくら。」

そして今日も、手を合わす。

しんと静まり返った、清潔な空間。

ここは、——ファミリー・メモリアル。つまり、ペット霊園。

この一角に、さくらは眠っている。

2009年9月28日没。1歳。

美緒が生まれたところから、そしてまた新一と志保のいたところの工藤家を知っている。

美緒にとっては、たったひとりの、かぞく。

霊園の職員が、感動したように、さくらの遺影に向かって、語りかける。

「さくらちゃん、よかったねえ。いいひとに、めぐりあえて。」

こんなふうにしあわせになれる野良猫が、増えるといいんだけどね。

「

——そうだったの、だろうか。さくらはわたしと一緒に暮らして、楽しかっただろうか。満足してるだろうか。

——出逢ったのは、さくらが満開になった、ある昼下がり。

美緒は、1歳、か、それくらい。

さくらは、1か月。まだまだ子供の、猫。子猫。

さくらに触って、ばいばい、と、手を振った美緒に、ついてきた。それが、出会い。

外へ出て、ふうと、息をつく。
また、言えなかった。

「さよなら」を。

さくらが亡くなった日から、何度も、何度も云おうとした。

けど、言えない。

ありがとう、は言える。
でも、さよなら、は言えない。

—— どうして、だろう。

亡くなったことを、認めたくないから？
かぞくが、居なくなってしまうたから？

—— ちがう、ちがう。

—— ほんとはただ、そばにいてほしかった——

あかい、紅葉が目の前を通り過ぎていく。
いつ、言えるかな。

—— 出逢ったのは、桜が満開になった、ある昼下がり。

まるで姉妹のように、過ごした季節。

いつまで、忘れないでいることができるだろうか――

――

いまはまだ言えないことば。

いつか言えるだろうか。

そのときは、笑っていられるだろうか。

そうして時が過ぎて、思い出は色あせて。

みんなのころから、さくらがいなくなっても。

わたしだけは、覚えていたい。

それが、とおいむかしのおもいで、ひと欠片でも、い

い。

さくらとずっといつしよに、いられますように。

去年の七夕の願い事。

でも、来年からは。

またいつか、あえますように。

それが1年後なのか、10年後なのか。

来世なのかは、わからない。

でも、あえればいいな――

――さよならがいえたとき。

そのときはきっと。

「またね」も、いえたらいいな、なんて。

別れたのは、秋の風が吹き始めた、9月。

（後書き）

あらすじの、
いえるかな、
あのことは、
は、
さよなら。
あえるかな、
またいつか、
は、
またね。

です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256i/>

さくら

2010年10月9日06時01分発行